

令和4年2月2日

令和3年度 ユネスコスクール NISHITA 校内研通信 No. 6

研究推進部 研究主任 佐々木

1年生 生活科「しぜんとなかよし」

1年3

◆本時について

1年間の生活や成長を振り返る活動を通して、小学生になってできるようになったこと、がんばってきたことなどを実感し、自分の成長に喜びを感じるとともに2年生への生活に見通しが持てるようになる。

◆協議会での意見 授業を振り返る視点

1年生校内研究協議会

■分科会提案

年度初めに「諸感覚」を生活科の芯として学習していく計画を立てた。春夏秋冬でフィールドビンゴを行い、諸感覚を養ってきた。子供たちは「目では何が見つかった？」などの見方を頭に置き、アサガオの観察などの活動を行ってきた。教科の枠にとどめずに、自分の成長をたくさん感じながら学習していけるようカリキュラムを組んだ。

単元では、①四季を振り返って感じたことを伝える ②友達の話すことを聞き取って自分の考えを伝えることに重点を置いている。

今回の授業は、あいまいさが残る授業だった。新たな分類が生まれたり、分類がきちんとできていなかったり…。分類によって白黒ははっきりつけるのが目的でなく、みんなで共有することや「ここでいいよね」という妥当性を探ることが目的。最終的に「自分はどう思ったのか」ということが述べられる姿を目標としている。

話し合いの経験を積み「自分の意見を伝えられる喜び」「友達の意見から新たな発見をする楽しさ」を味わえるとよい。

■授業者自評

授業者ばかりが話すのではなく、みんなで確認しみんなで進んでいくことを目指した。手を作業として見るのか、触感として見るのが難しい。ご指導いただき、より良い授業をつくっていきたい。

■各学年から

6年
分類の必要性や良さを子供たちが理解していたか。司会を立てるのであれば話し合いの人数は4、5人にすべき。「発表したいこと」と問うと広がりすぎるため、「発見したこと」に絞って書かせるとよかったのでは。

5年
子供自身が分類の必要性を感じられたか。諸感覚はあくまでも補助的なものであり、それを分けることを目的にするのは1年生にとって難しかったのでは。

4年
何のために分類するのが話題に挙がった。何かがあって心が動くのであり、諸感覚と心を同列に扱うのはどうだったのか。ベスト3を選ぶことを目的にするなどすれば意義が生まれたのでは。まずペアで話し合うなどすればより良かった。

3年
「なぜ楽しいの」と追及していくとより深まったのではないか。

2年
分類の必要性はどうだったか。諸感覚を使っていることを意識させるための分類であれば、自分で目シールなどを貼った段階で分類できていたのでは。この後どうまとめていくのか。自然の中で諸感覚を使うものもあれば、昔遊びなど諸感覚を意識するのが難しい単元もあったのでは。

1年
○分類の必要性
発表に向けた活動の中で「これって必要？」とそぎ落とされていく。「心が動いた」の下に諸感覚を働かせた「理由」が来る。「自分は目を使ってこう思ったよ」と友達に伝えるために整理している。諸感覚と心を同列にすることについて、最初の段階で「ハートは別で考えよう」とすべきだったか。

【講師の先生より】

【授業の振り返り】

1年生への要求としてはハードルが高すぎた。分類項目について、何をどこまで取り扱うのかを指導者がはっきりと示すべきだった。

振り返りシートはあまり時間を掛けなくてよかった。「今日の話合いを振り返って書きましょう」という設問に子供は戸惑っていた。「今日の活動で見つけた新しい発見は何ですか」という設問がおすすめ。「もしくは」「非常に」など大人向けの言葉が難しい。振り返りシートを束ねて後で見られるようにするとよい。

【評価の話】

ESDの評価は子供が自己評価することが重要。活動の中に自己評価を組み込む。自分のことを俯瞰できる力を付ける。最初と最後だけでなく、途中どうだったかの道筋が分かる評価をする。

校内研究は日本独自のもの。ユネスコスクールで評価されている。今日の授業は持続可能な社会づくりにつながっていたか。「こういう力を付けたことで将来こう役立つ」という資質・能力を重視した教育課程の評価を行うとよい。

ルーブリックを子供一人一人と話し合い決定する。(個別最適化)

一次ポートフォリオ(調べた物の記録・保管)とパーマナントポートフォリオ(発表に向けて調べたことをまとめたもの)がある。身に付けたい資質能力を話し合っ決めて、メタ認知能力を育てながら自己評価させる。

【研究主任より】

学期末という忙しい時期に、授業づくりに取り組んでくださった1学年の先生方、ありがとうございました。

生活科での活動を通して育成された諸感覚を使った取り組みを、今後の6年間の学びにつながるように工夫することで、持続可能な社会づくりの基礎力が育成されるのだと考えました。

分科会の提案であった、混沌や揺らぎ、あいまいさ、は現代社会が排除しようとしてきたものと考えます。しかしこれから求められる力は、これらを受け入れたり、解決しようとする力ではないでしょうか。妥当性、合意形成、省察、内在化等を経験するような場面を、教師が意図的に設定することで、他者を尊重し、認め合う力が育成されるのではないかと考えます。また、このような場面は低学年だからこそできるのではないのでしょうか。

評価に関して、次年度以降の本校のESDの方向性と関連付けて今後議論したいところです。その前に、今年度のまとめをしっかりといきましょう。研究授業の指導案や単元計画の更新をお願いします。

今年度の研究授業は今回が最後となります。学年の先生方で力を合わせて授業づくりをしていただいたことに感謝申し上げます。その後の授業との接続や育もうとした資質能力はその後の学習とどのように関連付けることができたでしょうか。事後授業等について発信していただくと大変勉強になります。

棚橋先生のお話から、1年間で育成を目指すESDの資質能力・価値観について、本校ではESDで目指す資質能力・価値観(以下、「ESDの価値観」)を明確にした、生活科・総合的な学習の時間の単元計画づくりを行っています。今年度は校長先生が、来年の80周年に向けて、「SDGs17パートナーシップで目標を達成しよう」を重視することを、昨年度の「未来の学校」で示しています。ESDの資質能力、価値観では「つながりを尊重する態度」や「相互性」などにあたるでしょう。今年度のこれまでの取り組みをふり返り、どんな力が育ったか、3学期の所見作成とともにふり返ってみたいと思います。

次年度の校内研究も、どうかよろしく願いいたします。